

岩田直樹「再解釈」論

奈良敏行



二冊目の著書、『宇沢弘文「社会を治す」——社会的共通資本の再解釈』が七月二十九日に刊行された。出来立ての本を運んできた小取舎の村瀬謙介さんと一緒にサインをお願いした。岩田さんが「何と記そう?」という村瀬さんがラインをたくさん引いた自分の本を取り出して、これがいいですと示した。「生活に価値を与えるのは行動である。」(P.243) わたしの名前と一緒にこの文言を書いてもらった。

じつは単純な文言ではなく、この後には「倦怠や怠惰には、人間は満足できないだろう。」と続く。カント哲学への疑義なのだ。この「行動」は進歩という物語を無限に終わらせない袋小路なのである。だからユートピアを志向す

る進歩(行動)は留まるところを知らない虚構で、この矛盾の場所には何か補填するものが必要となる。この補填が「再解釈」なのだ。

長年にわたり思索された岩田哲字は、前著をまとめるあたりから「再解釈」という方法論を提示しはじめた。多くの読者が関心を寄せる概念でもある。

この度の著書では、再解釈とは何かという多くの人の問いに答えて、ガダマーの「地平の融合」という概念を援用してみせている。

《地平の融合とは、過去の地平に取り囲まれるテキストから現在の地平にとって重要と思われる問題意識を読み取り解釈する過程、すなわち過去の地平と現在の地平が重なり合う過程である。》(P.14)

わたしはこの「重なり合い」が「再解釈」の方法論だと考える。

宇沢弘文はフリードマンらの新自由主義と闘った人間だ。そこに重ね合わせたものは「社会的共通資本」だ。自然環境や社会環境を経済理論の中にどう取り込むかという課題の追求だ。「経済は社会に埋め込まれている」というのが結論だ。換言すれば経済の外部に社会や環境があるという発見だ。そこにはヴァナキュラーとも呼ばれ、互酬ともいわれる市場原理や交換の形式から外れているもの

の存在がある。この外部（「あいだ」）を補完するのが「再解釈」だ。

カントの矛盾にも補完が必要だし、宇沢の環境を取り込もうとする思想にも補完が必要だというのが岩田直樹「再解釈」論なのだと思う。

補完という作業に用いられるのが「現象学」である。行動は線的に未来へ向かい着地する場所を知らない。つまりこの「行為」をノエマなきノエシスの行為ととらえる。この先に価値というノエマを生活に与える結末があれば、それは幸いなのであるが、虚構のユートピア思想だと断裁する。

このノエシス的な「行動」をさらにメタノエシスとしてとらえるのが岩田直樹哲学なのではないだろうか。この現象学理論は、長年研究し続けた廣松渉の「四肢的な構造連関」と重なるものがないだろうか。現象の二重性と認識主体の二重性を重ね合わせるものだ。この理論を「融合」の方法として「再解釈」の方法論としたのかもしれない。

岩田氏は「音信不通」に「洋上での転向」というシリーズを書き続けている（全十回予定）。地球物理学を専攻していた院生の時代に海洋調査船の上で、突如文転するきっかけに出合ったという話だ。「何があったんですか？」と聞いたら、「夜明けの星々を見ていたら何か身体感覚とし

て思索の蝶番が外れた」という意味のことを語ってくれた。後に「メルロ＝ポンティに深く傾倒していた時期があった」と述べるが、「身体感覚」がそれまでの思索に「補完」するものとして発現してきたということは重要だと思われる。

わたしは今回の本を読んで、思索の転回を与えたものは、星々でなく、じつは海洋だったのではないかと想像するようになった。理系の学びは例えていえば「条理空間」の数値化できるものであり、果てしのない海洋の広がりによって身体感覚を變成して現れたのは「平滑空間」だったのではないだろうか。そこには指標もなくもちろん数値化もできない生成変化の驚きがあったはずだ。これはドウルーズの人間の外部へ出ようとする概念装置だが、ドウルーズは「構造自身が動的に生成する」ともいう。これは「四肢的な連関構造」と近い発見ではないだろうか。

宇沢弘文の「社会的共通資本」に補完する概念を挿入したのがこの本の方法論なのだが、それは「あいだ」という概念だ。しかし、新自由主義と自然環境を両立させるという意味ではなく、ここでの「あいだ」は外部にあるのだ。市場原理や交換の形式から外れているもの、つまり互酬というものが必要になってくるということを警鐘しているように受取った。